

イタリアンライグラスいもち病の宮崎県における発生

岡田 大・後藤 重喜

(宮崎県総合農業試験場)

昭和52年9月下旬、都城市庄内町東区のイタリアンライグラスに、イネのいもち病によく似た病害の発生がみられた。調査の結果、いもち病であることが確認された。分生胞子は無色ないし淡灰白色で洋梨型、3胞が主体で大きき24~30×6~8μ、平均28×7μであった。その後、川南町および佐土原町においても本病の発生が認められたが、佐土原町以外の発生場所は、いずれも高台の黒色火山灰土壌、畑作地帯で、周囲はトウモロコシ、ソルゴー栽培がみられ、水田からはかなり離れたところであった。

従来、イタリアンライグラスのいもち病については、北海道(1956)、高知県(1969)および静岡県(1970)で発生したとの報告があるが、いずれもイネのいもち病菌(N-2型)によるものであった。

本県の場合、イネからのいもち病菌ではないように思われたので、都城市庄内町で採集したイタリアンライグラスのいもち病菌を供試し、その寄生性を調査した結果第1表のとおりであった。

なお、菌の同定、寄生範囲については、現在、各関係機関に依頼して調査中であるが、1960年に後藤・山中両氏が報告したスイートバーナルグラスからのいもち病菌の寄生性とよく一致し、スイートバーナルグラス、バーナルグラス、トウモロコシ、コムギ、オオムギ、ライムギおよびエンバクを強く侵し、イネ、メヒシバ、ヒエ、

モロコシ(コウリヤン)には病原性がなかったと報告している。

また、場内畜産部のイタリアンライグラス系統適応性検定は場で、11月中旬に発病の品種間差異を調査した結果、第2表にみられるように早生種に発病の多い傾向が認められた。

以上、イタリアンライグラスに発生したいもち病について、これまでの発生経過と調査概要を述べたが、今後はこの発生生態と防除対策の究明に努めたい。

第2表 イタリアンライグラス品種、系統のいもち病発病調査(1977年11月17日)

品種、系統名	発病株率 (%)	病斑面積歩合	品種、系統名	発病株率 (%)	病斑面積歩合
高系14号	2	0.006	愛知6号	28	0.104
マンモスA	14	0.042	友系9号	43	0.129
ヒタチアオバ	13	0.059	ナスヒカリ	32	0.146
高系13号	20	0.060	ワセアオバ	48	0.192
友系8号	23	0.069	愛知5号	67	0.221
マンモスB	25	0.075	山系18号	50	0.320
友系10号	25	0.075	ヤマアオバ	65	0.375
エース	27	0.081	水田早生	100	0.870
高系12号	28	0.084	ミナミ早生	92	0.909
愛知4号	33	0.099			

注) 1.調査は、イネいもち病の調査基準に準じた。は種9月22日。
2.数値は3区の平均値、ただし、マンモスA、ヒタチアオバは6区の平均値。

第1表 イタリアンライグラスいもち病菌寄生調査

稲品種	真性抵抗性推定遺伝子型	寄生性の有無	稲品種	真性抵抗性推定遺伝子型	寄生性の有無
愛知旭	pi-a	-	クサブエ	Pi-k	-
トワダ	Pi-a	-	レイホウ	Pi-ta ²	-
藤坂5号	Pi-i	-	レイホウ	Pi-ta ²	-
宮崎7号	Pi-i	-	新2号	+	-
ヤシロモチ	Pi-ta	-	フクニシキ	Pi-2	-
関東51号	Pi-k	-	Te-Tep	?	-
大麦(小鮎有1号)		+	食用ヒエ		-
トウモロコシ(デントコーン)		+	メヒシバ		-
			イタリアンライグラス(コンモニ)		+